View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

17. 重篤な合併症を発症するも待機的手術まで管理できた感染性心内膜炎の一例

循環器内科
○石井　晶子　　西　　成寛
増田　拓郎　　寺西　　仁
幡中　邦彦　　藤尾　栄起
向原　直木

症例：57歳，女性．全身性エリテマトーデスで当院膠原病内科通院中（ステロイドと免疫抑制薬内服中）．発熱，意識障害にて当院へ救急搬送．敗血症性ショックの診断で，抗菌薬，大量補液，ノルアドレナリン等による治療を開始．心臓超音波検査で大動脈弁閉鎖不全症と弁に付着する７mm大の疣贅を認め，血液培養からはグラム陽性菌を検出し，感染性心内膜炎と診断．急性心不全，心原性出血性脳梗塞などを合併していることから，早期手術は高リスクと判断し，内科的保存治療の方針とした．６週間を要したが，多診療科・部門との連携により集約的治療が奏功し，独歩できるまでに全身状態は改善．残存する大動脈弁閉鎖不全症に対して，心臓外科にて待機的に大動脈弁置換術を施行した．現在，軽度の不全麻痺を残すが，独立した日常生活を送っている．多診療科・部門との連携が，重篤な合併症を有する感染性心内膜炎治療に奏功した症例を経験したので報告する．

18. 調剤室における疑義照会について

薬剤部
○中村　祥敬　　荒井　信子
樋本　真紀　　村上　陽子
石井　雅人　　上野　聖子
奥新　浩晃

【目的】薬剤師は処方内容に疑わしき点を発見した場合，処方医に対して疑義照会を行い医薬品の適正使用および過誤の防止に努めている．院内においては各病棟，化学療法室などに常駐する薬剤師が処方内容の確認を行っているが，初期の調剤時にいかに効率よく確認および疑義照会を行うかが重要と考えられる．そこで，当院での傾向を把握するため，調剤室における疑義照会の内容を調査したので報告する．

【方法】調査対象は2018年４月～10月の処方箋（内服・外用）とした．また，疑義照会の内容については調剤室に保管されている疑義照会記録を参照した．

【結果・考察】対象期間における処方箋は58,598枚，そのうち疑義照会の対象となったのは284枚（約0.5％）であった．また，内容を分類すると多いものから，入力ミス等によるもの（44％），常用量の誤りなど（38％），検査値にもとづく用量調節に関連するもの（16％），併用禁忌（２％）となった．

以上より，用法・用量のほか，重複や日数など入力ミス等にも注意を払うことで効率よく処方内容の確認を行うことができると考えられた．

19. MRI対応液晶ディスプレイ（Sensa Vue）の有用性

放射線技術部
○日谷　翔太　　岩本起一志
福田　尚也　　岩見　守人
井手　充浩

【背景・目的】

2017年12月に映像と音楽を鑑賞できるMRI対応液晶ディスプレイ（Sensa Vue）が導入された．今回，Sensa Vueを利用することで快適な検査環境が作れるのかをアンケートを利用して検証した．また，ストレスとなっていると示唆された環境の改善を検討した．

【方法】2018年６月～８月の間に健診頭部MRIを受けられた患者53名（男性：32名，女性：21名）を対象とし，自作アンケートを実施，集計した．閉所恐怖症，小児の患者にもSensa Vueを利用し感想を聞いた．

【結果】Sensa Vueを利用することで，快適な検

査環境を作ることができた．閉所恐怖症の方では安定剤を使う予定が使わずに検査ができた．幼児でも入眠剤を使わずに検査できた例もあったが，映像を見て笑って動いてしまう例もあった．

20．化膿性脊椎炎について，自験例を交えて

整形外科・リハビリテーション科

○濱本　秀一　　江浪　秀明
井上　拓哉　　村田　洋一
川島　邦彦　　阪上　彰彦
松岡　孝志　　田中　正道
青木　康彰

化膿性脊椎炎は一般的に一次感染巣から血行感染で脊椎へ波及した結果生じるとされ，50歳以上の中高齢者や，糖尿病等の基礎疾患を持つ患者に多い．適切な治療を早期に始めなければ治療に難渋することが多い．加療法は抗生剤での保存加療で改善が乏しい場合や初期の段階で保存加療では対応が困難と判断されれば手術加療も必要となる．当院で化膿性脊椎炎に対し手術を行った2013年から2018年12月までの29例の傾向をみると性別は男性が多く，初期症状は発熱や腰痛，下肢の痺れ，膀胱直腸障害等の神経症状が多く，治療開始からCRPが陰性化するまで数か月から半年を要し，死亡例も３例あった．血液培養や生検を行う前に抗生剤投与され原因菌を同定できないまま治療を行った例も多くあった．重症例では死亡へと繋がってしまう可能性がある病態であり，初期から適切な加療を行うために疑わしい症状があれば鑑別に挙げて頂きたい疾患である．

21．ガイドラインを活用した小児急性虫垂炎診療

小児外科

○畠山　　理　　久松千恵子
野口　恵未

2017年小児救急医学会から小児急性虫垂炎診療ガイドラインが発表され，１）一次評価にスコアリングシステムを使用すること，２）腹部超音波検査を画像選択の第一選択とすること，３）active observationは腹部CT検査施行率を低下させ，かつ診断の遅れの防止に有用であること，が述べられている．当院でも2017年までの虫垂炎診療を検証し，2018年１月からもれなくスコアリングできるよう，電子カルテ用のテンプレートを作成，スコアに応じてactive observationを採用することを当科の基本方針として定めた．今回，スコアリングシステムを本格的に導入後の当科の虫垂炎診療の現状について検討したので報告する．

22．兵庫県の休日夜間急病センターでの小児への経口抗菌薬処方動向調査と適正使用に向けた介入

小児科

○明神　翔太　　仲嶋　健吾
吉井　拓眞　　吉本　啓修
井上翔太郎　　呉　　東祐
内藤　由紀　　半澤　　愛
藤原　絢子　　坂田　千恵
井上　翔太　　中迫　正祥
黒川　大輔　　神吉　直宙
上村　裕保　　中川　　卓
柄川　　剛　　高見　勇一
藤田　秀樹　　五百蔵智明
久呉　真章
本郷　彰裕（本郷小児科医院）

小児外来領域における抗菌薬処方動向調査や介入についての確立した方法はない．今回我々は神戸こども初期急病センター（以下神急）と姫路市休日・夜間急病センター（以下姫急）における経口抗菌薬処方動向調査を行った．調査年と受診者数はそれぞれ神急2014年４月～2018年３月，平均３万人/年で，姫急2014年９月～2018年３月，平均２万人/年であった．両施設ともに全受診者の10%前後に抗菌薬処方があり(神急７～11%，姫急10～16%)，経年的にいずれも６～７％程度の低下傾向を認めていた．